

環境文明社会づくり あれこれ(7)

加藤 三郎

源流 (7)

環境庁の設置は1971年7月だが、その時点でのストックホルム会議に向けての備えとしては、長官官房に国際担当参事官ポストが一つあるだけ。就任したのは、大蔵省の国際金融畑出身の平尾照夫さんだが、部下もおらず会議までには一年もないので、早速、庁内で国際経験のある若手職員のリクルートを始めた。かき集められたのは、林野庁、労働省、外務省、専売公社等からの出向者と私である。この参事官室は、会議直前の5月に長官官房国際課と格上げされ、平尾さんが課長になり、他のメンバーもそのままストックホルムに突入した。

ここで私たちスタッフが大わらわに準備した主な作業は、①水俣病、イタイイタイ病、四日市大気汚染など日本で多発した公害病に対する日本政府の対策を説明する英文パンフレットの作成、②日本政府代表である大石武一長官のスピーチ原稿の起草などであった。

当時日本は高品質で安価な家電製品などを欧米に猛烈に売り込んでいたので、公害対策をろくにしないで、その分安い製品を売り込む「公害ダ

ンピング」だ、との厳しい批判が欧米のメディアで大きく取り上げられていた。忘れられないのは、スウェーデンのジャーナリストが東京で多くの人がマスクをかけているのを見て、大気汚染がいかにかいひどいかに示す証拠として大々的に書いたことで、日本は「公害先進国」とのレッテルを貼られ、大きな話題になった。現にストックホルム会議では、日本の市民団体が水俣病などの公害患者を何人も連れて行き街頭を練り歩いたこともあって、内外の耳目を集めていた。しかし政府としては、1967年に公害対策基本法を制定し、70年には公害法制を整備し、71年には環境庁を設置するなど公害対策に本格的に取り組み始めたので、公害ダンピング批判は当たらない旨主張するためにも、パンフレットを配布する必要があったのだ。

そのような雰囲気の中で、大石長官のスピーチ原稿を用意するに際し、課長は課員全員にスピーチに盛り込むにふさわしいアイデアを出せと要求した。私は二つ出した。一つは、日本人は昔から自然を愛好し大事にしてきた民族であることを表すため万葉

集から古歌を引用すること、今一つは、ストックホルム会議の重要性に鑑みて6月5日からの一週間を「環境週間」と定め、世界中で記念行事を行うよう提唱することだった。幸い、私のアイデアは課長らの採るところとなり、最終的には長官演説の冒頭部分で、「春は桜、夏の光、秋は紅葉、冬の雪景色と、私どもの祖先は長い間それぞれの季節に生きる喜びを味わって参りました。1200年の昔、万葉の詩人は『石ばしる垂水の上のさ蕨の萌えいづる春なりにけるかも』とおおらかに早春の喜びを歌い上げております。このように日本人は何世紀にもわたって自然を愛し、自然とともに心豊かに生きて参りました。」と述べた。

一方「環境週間」については、国連事務方より「週間」は長いので「日」にしてほしいとのことで、6月5日を「世界環境デー」としてセネガル等と共同提案し、会議で正式に採択され、今でも世界中で実施されている。日本では、「環境の日」となっている。

